

第36回

中国の現代史

監修・講師
 上田 信

学習のねらい

中国では辛亥革命によって清朝が滅亡し、アジア初の共和制の国家、中華民国の建国が宣言されるが、内戦が続き安定しなかった。中国を侵略した日本が1945年に敗れた後、内戦を経て成立したのが社会主義による国づくりを目指した中華人民共和国であった。建国のリーダー毛沢東は、農業の集団化などを強引に行ったため、経済は混乱した。1980年代に次のリーダー鄧小平のもとで市場経済を取り入れ、高度経済成長を達成した。しかし、急速な経済発展の陰で国内の経済格差や、周辺地域との対外的な摩擦などさまざまな問題も抱えることになった。

- ・ <日中戦争と毛沢東>
- ・ 蒋介石の北伐 満州事変 日中戦争 国共内戦
- ・ <解放から開放へ>
- ・ 大躍進政策 文化大革命 改革開放政策 天安門事件
- ・ <世界の中の現代中国>
- ・ 世界の工場 GDP世界2位 経済格差 人権問題

■ ■ ■ 日中戦争と毛沢東 ■ ■ ■

辛亥革命を経てアジア最初の共和国が成立した中国では、軍閥が割拠する状況が続いた。中国統一を目指した蒋介石が、国民革命軍を率いて北伐すると、日本は中国東北部の利権を守ろうとした。満州事変によって満州国を成立させた後、さらなる勢力拡大をはかって中国との全面戦争に突入すると、それまで争っていた蒋介石の率いる国民党と、毛沢東が指導する共産党は協力して日本と戦うが、日本敗戦後は内戦が再発する。腐敗が目立つようになった蒋介石の政権が国民の支持を失う一方、共産党は農村に勢力を拡大した。蒋介石は敗れて台湾に逃れた。共産党の最高指導者となった毛沢東は、中華人民共和国の成立を宣言した。朝鮮戦争後の冷戦のなかで、中国はアメリカなど資本主義陣営と対立するようになった。そのなかで建国初期にはソ連の協力を得て、社会主義に基づく国づくりを進め始めた。しかし、ソ連がアメリカとの平和共存路線に転ずると、中ソは対立するようになる。

■■■ 解放から開放へ ■■■

ソ連とは異なる社会主義路線を進むことになった毛沢東は、農村の集団化を進めて、多くの労働力を動員して農業基盤を整備、農業の利益を工業化に回すという路線を模索する。1958年に「**大躍進**」と呼ばれる政策を始めて、市場経済を排して強引に農村を「**人民公社**」と呼ばれる集団に組織し、用水路やダムの建設を進め、さらに伝統的な技術で製鉄を行うなどの政策を進めたが、性急でずさんな計画だったため、経済建設は破綻した。当時、党の総書記であった鄧小平などは、市場経済を一部取り入れて、経済の立て直しを図った。しかし、「大躍進」の失敗で指導権を失っていた毛沢東は「**文化大革命**」という運動を起こし、鄧小平などを失脚させた。1976年、毛沢東が死去すると鄧小平は最高指導者に復帰し、市場経済を導入する改革をすすめ、対外的に投資を呼び込む開放政策を採った。政治の民主化を求める運動が活発化すると、それを弾圧した（**天安門事件**）。民衆の不満を抑えるために、経済発展を加速することになる。

■■■ 世界の中の現代中国 ■■■

経済発展を続けた中国は、2001年、世界貿易機関（WTO）に加盟して、世界経済との結びつきを強め、2008年のリーマンショックによる世界規模の不況では、およそ56兆円の景気対策を打ち出して世界の経済をけん引した。中国はインフラの整備と、安い労働力を海外資本に提供することで「**世界の工場**」と呼ばれるようになる。2010年にはGDPで日本を抜いて世界第2位となった。しかし、急速な経済発展の陰で、国内の経済格差、少子高齢化、人権問題、また周辺地域との対外的な摩擦など、さまざまな問題も抱えている。

考えてみよう 調べてみよう

- 日本が中国を侵略した過程を調べ、年表にまとめてみよう。
- 中国の経済政策について、毛沢東時代と鄧小平時代の違いを、農業・工業・対外関係に分けて比較してみよう。
- 現在、中国が直面している社会問題を、新聞記事などから拾い出し、その歴史的な背景を考察してみよう。